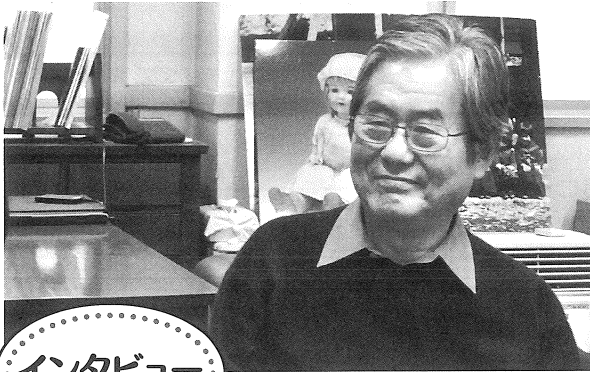


特集

問

い直そう、保育の中のとあたりまえのこと？

「共感」って何だろう？



インタビュー

さえぎ ゆたか
佐伯 胖氏

認知心理学者。青山学院大学教授。東京大学名誉教授。
著書：『「学び」の構造』東洋館出版社（2000）、『共感 -
育ち合う保育のなかで』（編著）ミネルヴァ書房（2007）ほか

保育・幼児教育の世界で、あたりまえのように、大切に
使われている言葉、今回は「共感」を特集します。『共感』
という本も出していらっしやる佐伯胖先生に、まずインタ
ビューさせていただきました。共感って、人間同士だけで
するものじゃないのかも……？ どんな質問をしても、「目
からうろこ」のお話を伺うことができました。

「私はこう考える」のコーナーでは、保育の世界、絵画
の世界から、「共感」について面白いお話をご寄稿いただい
ています。
(編集委員会)

聞き手 宮里暁美・伊集院理子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

浜口順子（お茶の水女子大学大学院）



痛みや苦しみに対する共感

宮里 保育の中で共感という言葉はよく使われています。子どもが楽しんでることに共感するということ、ような感じで、保育者が子どもを理解する時の大事な姿勢として共感という言葉が使われることがよくあるように思うけれど、子ども同士が共感するっていうのはどういうことなのか、と改めて考えていたらわからなくなってきたんです。例えば、楽しく一緒に滑り台を滑っている子どもたちがいるとして、そこでは同じ楽しさを味わっているんだけど、これって共感っていうことなんだろうか。子どもが共感するってどういう状態のことを指すのか、知りたいと思うのですが。

佐伯 これは非常にいいところで話が始まりました。「共感」は英語で言うと、エンパシー (empathy)。意外だと思われるかもしれないけれど、empathyの研究は、動物行動学では昔から重要なテーマになっている。他人の痛みや苦しみに対して「ほうってお

けない」ということが最も中心的なテーマで、他人と「同じ(楽しい)思い」を共にすることではありません。つまり、隣で苦しんでいるチンパンジーがいると何とか助けてあげたいとか、何とかしてあげようとするということが共感の研究の最も中心的テーマなんです。

生まれて間もない赤ちゃんが、他の子が泣くと自分も泣く。自分の泣き声を録音して聞かせても泣かない。他人の声だから泣くんです。生後六〜八か月くらいの子どもが、困っている子どもを見つけると何とかしてあげてほしいと保育者に助けを求める行為をする。他人のことが放っておけないという気持ちのようなものの表れですね。それが共感の原点だと思っていたら、それが大事です。

浜口 感じるだけではなくて、何かしてあげたいと思うところが大事なんです。

佐伯 勘違いでもいいんです。自分の好きなタオルを持って行ってあげたり、慰めてあげようと思った時に、何かをしないではいけないというのが事の

出発点です。子どもの共感はとても小さい時から見られます。先生が子どもにも共感するというのでもいいのだけど、困っている子どもに対して思わず手が出るとというのが本当だと思ふ。

浜口 好調の人に対してより、困っている人に共感を抱くというのはどうということなんでしょう。相手のうれしい楽しいという気持ちに共感するのは、動物として生きて子孫を繁栄させていくことと直接関係ないということだからでしょうか。

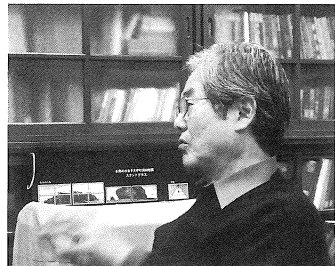
佐伯 そうでしようね。むしろ、助けてあげるといふのは人間が人間になつていく時にもすごく大事。

先日、NHKスペシャルの「ヒューマン…なぜ人間になれたのか」という番組を見ました。アフリカの何万人もいた人類の祖先の人口が、寒冷期に入つて数千人に減つてしまつた。ところがその寒冷期の時代に、今のホモサピエンスのみは増えている。なぜかという、部外者に乏しい食べ物を分けていたからなんです。そういうことをやったのは、私たちの先祖だけでした。そのことが黒曜石の分布でわか

つた。寒冷期前までは半径一〇キロ程度しか分布してなかつたのが、寒冷期に入ると七〇キロまで広がっている。餓死寸前の人たちに自ら飢餓寸前でも食べ物を分け与えていたのです。

今回の大震災でも、ボランティア的に助けに行こうという行動が増えて、それが今も持続している。阪神大震災の時に比べると、今回のほうがもつと人々が他者のことに気を遣うようになつていく。これは寒冷期の人類と同じで、どん底を経験することによって、他人に対する共感性が高まつているといえるのではないか。

幼稚園でも仲間内同士で助け合うということはある。自分の友達がいじめられると助けに行く。でも相手の子が泣くと気にする。自分の仲間を守れなければ、そのために他の子が悲しんでいることが気になる。仲良しでない子どもに対しても心が動



▲佐伯 胖氏

くところが共感の芽生えだといえる。そういうことがだんだん広がってくると、ただ自分たちだけがよければそれでいいということにはならなくなる。

浜口 社会性が発揮されて言葉も使えるようになってくると、遠くの人ともコミュニケーションが取れるようになると考えられていますけど、人間というのは、言葉もままならない時期から、自分の仲間だけではない人へのエンパシーを見いだしているということなんですよ。

佐伯 それはむしろ子どものほうがある。だんだん消えていっちゃうんだな。

宮里 それはなぜ消えるんでしょうか。

浜口 社会性がはじめて高くて、だんだん低くなっていくのかもしれない。

佐伯 そういう意味では、小さい子たちの中にあるすごくすてきなものを、大人がもつと見られるようになったほうがいい。期待する子になっっているかという視点ではなく、子どもは思いがけなくすごい！ということを見ていきたい。

他人の痛みを共に感じること

浜口 幼稚園で実習して、「子どもは優しい。でも大人の優しさどこか違う、子どもの優しさは何だろう」と考えて卒論を書いた学生がいました。そして、大人のもっている優しさの基準から子どもを「優しい」と見るのは、どこかおかしいかもしれないということに気付いていった。よく言いますよね、子ども「なに」優しいとか……。

佐伯 子どもを見ていると、他者の痛みを感じるという共感がすごくあることがわかる。自分は苦しんでないけど他人が苦しんでいる時に、その苦しみを放っておけない。小さいころのそういう気持ちを、私たちはだんだん無くしてしまってしまふ。見て見ぬふりをしたりして。それが根源的に違っているんじゃないかと思っている。



▲浜口順子氏

シモーヌ・ヴェイユ（フランスの哲学者、社会運動家、サルトルと同時期）が、隣人愛とは何だろうかという問いの中で挙げた説明が今話していることにつながっている。少し紹介しますね。

古くから言い伝えられている聖杯伝説が取り上げられている。聖杯とはキリストが最後の晩餐の時に使った杯。その杯を代々大切にしているという話が古くからある。その一つに、聖なる杯を守っている人が、実は王様なんだけど、戦争に負けたか何かで、ぼろぼろになってしゃべることも動くこともできずに道端に転がっていた。その聖なる杯を次の人に渡せばその人は癒やされる。どういう人に渡せばいいのかということ、王様は前々から知っていた。それは、英訳したもので言うと、*What are you going through?*「あなたはどんな苦しみを今経験しているんですか」という問いなんです。それを問いかけた人にあげなさいというんです。それまで通りかかった人たちは何をしていたかという、助けてあげようと言って水をくれたり食べ物や横に置いていった

り、いろんなことをしていた。でもその人たちは杯を渡さない。そうではなく、あなたの苦しみは何ですかと問うた人に杯を渡した。

隣人愛とは相手にとって良かれと思うものを与えるのではない。その人自身がどういう苦しみをもっているのかということ、こちらが空っぽになって教えてくださいかかわること、このことが隣人愛だとシモーヌ・ヴェイユは言っている。これが私のいう共感の原点です。つまり他人の苦しみに *what are you going through?*「いったいあなたは どういうことで苦しいの？」とスポツと入れるということが最も根源的であると思う。

放っておけないという気持ち

宮里 お話を聞いていて、幼稚園の保健室のことを思い出しました。保健室は絵本の部屋も兼ねているので、いろいろな人が集まってくる場所なんだけども、そこでこんなことがあります。友達とけんかをしてプンプン怒りながら保健室に入ってきた年

中組の子がいたんです。「どうしたの？」って養護の先生がその子の話を聞いていたら、年長組の子がそばで同じように話を聞いていて、聞き終わった時に「あるある、そういうこと。そういう時は、幼稚園の中をぐるっと回ってくるといよいよ」と気分転換するアドバイスをしてくれたそうなんです。すごいですよね。このことを他人の痛みや苦しみに対する共感という話を聞いていて思い出しました。

幼稚園では、誰かが泣いたり転んだり、何かが起こるとみんながわっと集まってくるということがよくあります。何か事が起こった時に、気が付くといろいろなクラスの先生たちが「どうしたの？」と集まってくるということもあるんです。

佐伯 いいですねえ。放っておけない。

宮里他 そう、放っておけないんです。

佐伯 それがものすごく重要なことなんです。新聞で誰かが言っていたけれど、愛ということの反対は憎しみではない、無関心だという。隣人愛の反対は無関心。共感を語る時には、そういう観点でとら

えてもらいたい。

宮里 でも一方で共感は大変と言いながらも、例えば誰かが転んだ時にみんなが駆けつけると、あなたたちは関係ないんだからと声を掛けることもあるんじゃないでしょうか。放っておけない行動をおせいかいととらえて評価しないというのもあるかもしれない。

佐伯 子どもなりの放っておけない気持ちと、大人の知識や経験をもつての放っておけないというのはズレがもちろんある。こちらの考えているやるべきことが思い浮かぶために、邪魔をしないでほしいという思いをもつこともある。時には子どものおせっかいは排除することはあり得るし、緊急時には必要でも、自分はその子を放っておけない気持ちになつたということを、否定されたと思わないようにしてもらいたい。その時でなくていいから、どこかで子どもがその気持ちになったことを見てあげてほしい。

浜口 今、感じる大人が減ってきているようにも思

う。保育者はそれこそ共感するような能力を残しておいてほしいけれど、これって高められるのかしら。佐伯 幼稚園や保育所の現状を言うと、ますます共感性ということが否定されてきている。けがをさせない、トラブルを起こさせないという保育の項目立てがものすごく増えて、がんじがらめになっている。そのことが一番怖い。処方箋的なことをいっばい知っている保育者が良い保育者だと評価する動きがあるけれど、違うんだという声を上げていってほしい。

保育者養成課程で、マニュアル集のようなもの、トラブルを起こさせないノウハウ集のものをたたき込まれるような傾向がある。実習指導という時には、ナイーブな学生さんが、ふっと心を動かすことってある。そういうことをすてきたと評価するのか、あなたはこうすべきだったんじゃないの？ ということを指摘するのか、大きな分かれ道になる。

保育者養成の段階から、私たちにとって一番大事なことは、そういう What are you going through? わからないならわからないまま何とか教えてね、と

いう格好で子どもに向かい合うということが大切で、その基本が共感的かわりというものです。何々をしてあげればいいという共感とは違う。そういうことではなくて、どういことがいいことなのかかわらないと素直に認めながら相手に聞く、相手の思いに近づく、そういう精神って実は学生さんのナイーブな、それこそ先生っぽくなっていない人に意外とあったりする。そういうことを打ち消してしまうような実習指導をすると、だんだん表情の硬いカチンカチンの保育者が出来上がってしまう。そこを崩すことが今非常に重要な段階ではないかと思う。

共感とは一緒にわからなくなる

宮里 共感ということを考えていて、保育の中で使われているそれは、願いのような言葉であって、ゴールの言葉ではないと感じました。その子が見ようとしていたこととか、味わおうとしていたこと、そこで感じていることを私も一緒に感じていたいという願いの言葉なんじゃないか。子どもが感じている



▲宮里 暁美氏

ことはどこまでいっても本当にはわからないかもしれない。誤解や勘違いもあるかもしれない。それをわかった上で、あなたが見ようとしていることを私も一緒に見たいと思う願いのような言葉なのかなと思った。

佐伯 共感とは一緒にわからなくなつてあげること。だから What are you going through? あなたは何が本当に苦しいことなんでしょうかと聞くことを、本当にわからないという思いでかわかることが大事で、あなたはきつとこうなんでしょうという思いでかわつていくのではないということです。

相手を理解したと思つたとたんに理解していないということになる。だから理解できないということとどこかで受け入れて、いったいこれつてどういうことなの? という感じ、教えてという感じで子どもとかかわる。本当はどうなんだろうと疑問をもちながら、本当のことはわからないということを中心にどこかにドスンともちながら、子どもから教わると

いうことが大切なんです。

子どもが見ているところよりも私たちはもう少し先や前を見るから、子どもと同じことを考えるだけではない。子どもが勘違いして考えていたり近視眼的に考えていたりする場合もある。でも本当の子どもの願いはとなると、子ども自身もわかっていないこともあるから、それは一緒に考えていくしかない。子どもにも合わせるという話とは違う。

子どもと同じ思いをするというか、同じように感じるのが共感ということではない。その子にとつてのつらいこと、本当に克服したいこと、子どもが求めていることを共に求めていくという思いでかわることが、共感ということだと思う。

共感と探求心

浜口 例えば共感的な能力と科学的な探求心が直結する、というようなことがいえたら、現代社会では共感ということがもっと注目されると思うのです。今のカリキュラム論議の中では、子どもの共感性を

どう残すかという話よりも、探求心とか知的な能力を開発するというようなことが注目されやすい。保育者には共感性が大切だということはいわれているけれども、子どもの共感性を育てることがいかに優れた大人になることとつながるのかというところはあまり解明されてないように思います。

佐伯 科学や知識というものは「客観的」なものであるという考え方が世の中にあり、ここでは共感など情緒的な話は関係ない、勉強して学ぶしかないんだという教育を日本の社会はつくってきたし、学校ではそういう形で知を与えてきた。

ところが科学者とか本当の探究者の、世界とのかわり方はそういうふうではない。むしろ共感的に世界とかかわっている。自分なりに放っておけない、人ごとではない事柄として世界とかかわり、結果的に科学が生み出され研究というものが出てくる。その最も深いところの原点には、放っておけないという思いがある。自分なりに何かしなくてはいけない、手を伸ばさざるを得なくなる。そういう衝動

のようなものを育てないと、物知りはつくれても本当の探究者は出てこないと思う。

本当の科学者という人がどのように科学を志してきたかということをいろいろと聞いてみると、何かのめり込んで、その世界の中に自分がはまり込んでしまっている。気になってしょうがない世界の中に自分が入り込んでいくことが、科学の探究の原点にある。小さいころの話を聞くと、昆虫採集とか、虫好きの人がいっぱいいる。無我夢中で虫集めをしている。つまり虫が放っておけない。たまには羽を切っちゃったりするけど、放っておけない。何かそういう世界を小さい時からもっている。正しい知識を覚えさせ練習させるということで教育を考えている人たちには考えを改めてもらうしかない。

幼児期の経験が原点

浜口 それは困っている子どもを放っておけないのと似たようなことなのでしょう？

佐伯 同じです。気になつてしょうがないという世

界があるのは、結果的には生物学者になるとは限らずに哲学者になったりもします。何か小さい時から自分の中側から放っておけない世界というものにも悩まされている状態なんです。幼稚園の時の経験というものは、知的探究という意味で人間成長の原点になっている。幼小連携なんかでも学校教育的な知識の与え方を幼児期からしていくと、科学者や本道の探究者は生まれなくなる。粘土でも泥団子でもいい。朝来るたびにまで回さざるを得ない。どこの土がいい、どういうふうに水をかけたらいいなんて散々やって、やりまくらないといけない。放っておけない思いをもち続けさせるといことが、その子を知的に育てることにつながる。

浜口 人間にだけではなくて、ものに共感していくということなんですかね。

佐伯 それはね、少し話がずれているように思うかもしれないが、失敗というものを楽しむということ。

What are you going through? が永遠の問いとして常に問われること。子どもが小さな失敗を思いつ切

りやっている状態は熱中しているということなんです。大人から見ると「あ、あんなことやってる」という状態。本人も「しまった! こういうふうにしたほうがよかったかな」と頭を悩ましている状態で、それが、放っておけない世界なんです。

だから、「これは何事か」という探究が常に芽生え続けている世界、失敗が度重なっている世界を大事にしてほしい。失敗させない教育というのが流行っているけれど、私は非常に危険だと思う。

浜口 初めての局面に立ち向かえないということもいわれていますね。

佐伯 失敗をさせない教育が広がり、カリキュラムが浸透すればするほど、その傾向が強まると思う。

熱中して遊び、失敗を恐れずに何回でも挑戦するということを子どものころに経験するということがとても大事になる。だから、子どもの様子を見て、失敗をしているなと思ったら楽しみにしてほしい。この子は、この世界を放っておけないんだな、失敗いいねというように、見ていてほしい。

放っておくこと・そっとしておくこと

伊集院 自分ごとというところが、すごく大事ななと感じた。私たち保育者は子どものことを自分のことのように喜ぶ。子どもの成長を自分ごとのように喜ぶ、それがすごく大事なかなと思った。

佐伯 その時の自分ごとの自分って、以前の自分ではない。その時自分自身がある程度変えられた、そういう自分。それを今までの延長で、「やっぱりか」みたいなどころでは本当の共感にはならない。常に新しい自分に成り変わりながら、共感していく。
浜口 だから、放っておくっていうのは、自分の秩序のままでいられるんだけど、放っておけないというのはいえ、自分を変えて入っていくことなんですね。自分は変わっちゃおうということをあえてする。だから失敗ももちろんある。

伊集院 友達のことが気になっ



▲伊集院理子氏

て友達が困っていると助けてあげようとするんだけど、かえってこんがらがっちゃうということがあります。そんな時、はじめは「ちよつと放っておいて」と声掛けてたんだけど、その言葉には抵抗があった、「そっとしておいて」という言葉を使うようにした。放っておくこととそっとしておくこととは全然違うんだよ。それを子どもにも伝えたことがある。

佐伯 放っておくという状態は、目が離れている。そっとしておくという状態は、ずっと目が離れていない。それが根本的に大事なこと。そっとしておくというのは、What are you going through? というのは、ずっともち続けている状態なんだと思う。放っておくとそっとしておくのかかわり方は似ているように全然違う。距離を置くという物理的な状態は同じだけれども。その言葉の違いをちゃんと子どもに伝えるのはものすごく大事ですね。

(平成二十四年三月二十二日)